

雑誌『詩苑』掲載の詞作品について

王 書 凝

On the Poetic Works Featured in the Magazine “Shien”

WANG Shuning

Abstract

The magazine “Shien” was a remarkable platform for the publication of many poetic works. During its time, it stood out in the Japanese academic world as a unique literary journal that emphasized Chinese literature. This research note examines the creative process of composing verse by Japanese poets during the Edo and Meiji periods, as presented in “Shien.” In addition, the magazine serves as a historical lens through which one can observe tangible examples of cultural interactions and exchanges between Japan and China. This article presents relevant archival materials and the key poets involved in these cross-cultural dialogues. Looking ahead, future research efforts will not only examine Japanese poetic literature but will also broaden the scope to investigate Japanese poets who gained prominence due to the dynamic cultural interactions between Japan and China from an international perspective.

Keywords: 明治詞人、「詩苑」、森川竹磎、王國維

一、雑誌「詩苑」について

森川竹磎（本名、森川鍵、1869～1917）は、明治十八年（1885）詩社「鷗夢吟社」をおこして機関誌「鷗夢新誌」において詩詞の指導にあたった。竹磎はさらに、明治三十八年（1905）随鷗吟社に入社し、機関誌「随鷗集」の発行に携わる。しかし、大正二年（1913）竹磎は「随鷗集」の編集から離れ、鷗夢吟社で雑誌「詩苑」の発行をはじめた。なお、「鷗夢新誌」は明治四十一年（1909）第一四一集で終刊した。なぜ竹磎は雑誌「詩苑」の発行を始めたのか、それ

は詞の扱いをめぐって、「隨鷗集」編輯主幹の土居香國と意見の扞格を生じたい¹⁾。具體的には「隨鷗集」第一〇四編で「詞」欄が終了し、また第一〇五編で『詞律大成』の連載も終了している。

「詩苑」第一集巻頭の「冕言」に以下のようにある。

往年、予輩、同志と相謀つて、鷗夢吟社を創設し、月ごとに新誌を刊し、號を累ぬる一百四十。その後、故あって、休刊すでに久し。今や隆替の氣運を觀て、奮然自ら興起し、乃ち吟社を再興し、聊か詩教振作の爲め、微力以て盡すところあらむとす。

ここに「故あって」とあるが、それはまさしく上記の詞をめぐる問題があったことがわかる。このことから竹磎が雑誌「詩苑」を創刊したのは、詞を重点的に掲載する媒体が必要であったと考えられる。

この小考は、雑誌「詩苑」所収の詞作品に注目するものであるが、「詩苑」は詞だけを掲載するものではなく、詞の前に詩を掲載し、さらに明治の漢学者の論文や講義録などを掲載する、非常に充実した漢詩文の雑誌であることをあらかじめ断っておく。

ただ、「詩苑」には毎集必ず「詞」欄が設けられ、詞に比べて数の少ないものの、明治大正期の漢詩人の詞作品（填詞）が掲載され、竹磎自身もまた毎集、必ず一首以上の詞作品を発表した。また、高野竹隱、久保天隨、水原琴窗、藤本煙津などの詞作品が掲載されている。この小考では、参考資料として「詞苑」所収詞作者・詞牌一覧」を付した。

二、「詩苑」前史

明治に入ると、日本の漢詩壇では詞（填詞）が流行し始める。その中心が、森春濤・槐南父子の茉莉吟社と、その雑誌「新文詩」と「新新文詩」である。

明治大正期の詞については、「鷗夢新誌」「隨鷗集」「詩苑」が重要な掲載媒体であるが、その前にも「新文詩」と「新新文詩」に僅かながら詞作品が見られる。具体的に言うと、「新文詩」は森槐南の「南歌子 春夕」²⁾、「昭君怨 題畫蘭」³⁾、「滿江紅」⁴⁾（落葉如鴉）、「滿江紅」⁵⁾（菊悴蘭憔悴）四首の詞が収められる。これらは、いずれも森槐南十代の作品である。「新文詩」は森槐南の父、森春濤が中心となって編集、出版したものであるが、明治十六年（1883）に終刊を迎

1) 萩原正樹（2017）『詞譜』及び森川竹磎に関する研究』（612頁）

2) 明治十一年四月発行の『新文詩』第三十三集

3) 明治十一年十二月発行の『新文詩』第四十二集

4) 明治十三年十二月発行の『新文詩』第六十七集

5) 明治十六年十一月発行の『新文詩』第九十九集

える。後に、茉莉吟社では槐南が中心となって、明治十八年（1885）から「新新文詩」の刊行が始まる（明治二〇年終刊）。収録作品の種類は詩のみならず、詞や随筆も収録されている。「新新文詩」全三〇集のうち、森槐南の詞は「浣溪紗 雪夜夢醒」⁶⁾（清夜沈沈夢乍醒）、「卜算子 臺山晚歩口占」⁷⁾（獨自上東山）など二十首が収録されている。

森川竹磳は、森春濤に師事し、その娘をめとった。槐南にとっては、義理の弟に当たる。萩原正樹「森川竹磳年譜」⁸⁾によると、「鷗夢新誌」にも「浣溪紗」、「調笑令」などの填詞作品が収められる（筆者未見）。しかし、「詩苑」は「新文詩」「新新文詩」「鷗夢新誌」などに比べて、森川竹磳の個人編集であり、填詞の部分が比較的充実している。

三、「詩苑」の代表的な詞人

まず、森川竹磳を簡単に紹介する。森川竹磳（本名、森川鍵、1869～1917）は、森槐南の妹婿であり、明治18年（1885）、篠崎柳園とともに、「鷗夢新誌」を創刊、明治の漢詩壇で活躍した。

竹磳は自ら主宰する「鷗夢新誌」「詩苑」に詩のみならず填詞作品を数多く発表するなど、詞人としても活躍した。五十年にみたない生涯で六百首餘りの詞を残している⁹⁾。中国では、詞人として辛棄疾がその代表的存在だが、竹磳の詞は辛棄疾と並ぶほど多作を誇った。

また、竹磳は『詞律大成』という、詞律に関する専著（詞譜）を著している。これは、清の萬樹『詞律』を補訂したものであり、『詞律大成』ははじめ土居香國の「隨鷗集」で連載したものであるが、土居との関係悪化を経て、自ら創刊した「詩苑」で改めてこの著作を連載するなど、竹磳のなみなみならぬ執念が窺える。確かに『詞律大成』は大部の著作であり、竹磳にとっても畢生の大作であった。現在は、萩原正樹編『森川竹磳『詞律大成』本文と解題』でその全貌を知ることができ、この書の文学史上の価値についても詳述されている。

森川竹磳について、かつて神田喜一郎は『日本における中國文學Ⅱ 日本填詞史話』¹⁰⁾のなかで「わが日本填詞史上に輝く唯一の專家である」と評している。また、萩原正樹の専著及び『詞譜』及び森川竹磳に関する研究¹¹⁾がある。

以下、森川竹磳の填詞作品を一つ取り上げて具体的に見てみよう。

6) 「新新文詩」第一集

7) 「新新文詩」第二集

8) 萩原正樹（2016）『森川竹磳『詞律大成』本文と解題』（512頁）

9) 萩原正樹（2017）『『詞譜』及び森川竹磳に関する研究』はじめに「詞譜」と森川竹磳（3頁）

10) 『神田喜一郎全集』（1986）第七卷所収、同朋舎、一九八六、初出は二玄社刊、一九六七

11) 萩原正樹（2017）『『詞譜』及び森川竹磳に関する研究』同朋舎

蝶戀花 次王静庵韻

人欲除愁天不許。
煙景闌殘，
愁裏留人住。
蝶守餘花鶯禁語。
風前燕子空來去。

漫勸一甌茶潑乳。
小倚欄干，
道近斜陽暮。
把好時光提起與。
伊家未解青春誤。

人は愁いを除こうとするが、天が許されない。
霞のかかる春の景色はいままさに消えようとしている。
愁いの中に、人は留め置かれる。
蝶々は散り始めた花を守り、鶯はもう囀らない。
風の吹く中に燕はむなしく飛び交っている。

そぞろに勧めるのは、一甌の乳白色の茶。
欄干に寄りかかり立ち止まる。
道は近く、夕暮れ時の太陽が斜めに傾いている。
この良き時をあなたに捧げよう。
あなたは青い春をみすみす過ぎてしまったことをご存じないだろうから。

この竹筵の詞は、「詩苑」第九集（大正三年六月十五日刊）に掲載されたもので、題にもあるとおり、王国維（静庵）の詞に次韻したものである。王国維の詞「蝶戀花」は、「詞苑」第九集に見える。以下、その原文を、翻訳とともに示す。

蝶戀花

窗外綠蔭添幾許，
剩有朱櫻，
留得殘紅住。
老盡鶯雛無一語，
飛來銜得櫻桃去。

坐看畫梁雙燕乳，
燕語呢喃，
似借人遲莫。
自是思量渠不與，
人間總被思量誤。

窓の外、緑の樹木が蔭を作り、その蔭はどれほどであろうか。
さらにくれない色の桜桃ものこっている。
桜の花は散りつつあるが、くれない色を留めている。
老いぼれた私に、鶯の雛は一声も鳴いてくれない。
飛び交い、桜桃を銜えて去ってゆく。

そぞろに眺めるのは、
絵の描かれた梁につがいの燕が巣くい、雛を育てるさま。
燕はチュピチュピ鳴き交わし、
その声は春が終わるのを惜しむ人の嘆きに似ている。
あの人と一緒にいないことが思われてならない
人の世は常に、思いに耽ることばかりだ。

王國維の詞「蝶戀花」は上記の作以外にも「詩苑」第八集にも見られる。王國維の詞は全部で四首が「詩苑」に収めらるが、これについては後述する。

「詩苑」第九集は竹磬のこの作品を掲載したあと、高野竹隱の評語を付している。

竹隱曰、稼軒遺響、令人擊節不能已。

竹隱曰く、この作品には辛棄疾（稼軒）の気韻と風格があり、人を感嘆させて膝を撃ちやむことはない。

森川竹磬は晩春ののどかな風景を描くが、晩春ゆえに、春が終わることの愁いを「蝶」「餘花」「鶯燕」に結びつけている。竹磬が次韻した王國維の原作もまた、春が過ぎゆくのを惜しむ「惜春」を主題とする。王の作も「惜春」とつながるものとして「朱桜」「鶯燕」などを詠出する。しかし、一読すると、ただたんに、「惜春」を主題とした詠景の作ではなく、親しい友人と離れていることへの寂寥感もうかがえる。竹磬の次韻の作は、それに応えるものとなっており、竹磬の巧みな詞才がここに確認できる。

このような竹磬の詞作を、同じく春濤門下で、竹磬の同志であった高野竹隱は「竹隱曰、稼軒遺響、令人擊節不能已」と絶賛する。

一方、森川竹磬もまた高野竹隱を「稼軒」と讃える。竹磬の他の詞作品「沁園春 次高野竹隱見寄詞韻卻寄」¹²⁾に「肯漫然呼汝、稼軒身替」とある。この両者はお互いを「稼軒」（辛棄疾）と褒め称えているのだ。確かに、竹磬の作は四季折々の自然や風物に触れての感慨を詞に詠じており、このようなスタイルは辛棄疾の作品を彷彿とさせる。

萩原正樹「森川竹磬年譜」によると、明治二十四年（1891）8月18日に、竹磬は『宋六十名家詞』の「稼軒詞」を寫し終えている¹³⁾。また、明治二十五年（1892）3月15日には、『宋六十名家詞』の「稼軒詞」を読了している¹⁴⁾。このように森川竹磬は辛棄疾の詞を着実に受容していたのだ。高野竹隱の評価はこのような竹磬の辛棄疾受容を反映している。

辛棄疾の詞（南宋）は蘇軾（北宋）と並び表されて、「蘇辛」とも言われ、何よりも「豪放派」に分類される。しかし、竹磬には張炎、姜夔、吳文英など南宋の「婉約派」を思わせる詞作品もある。例えば、「法曲獻仙音」について、高野竹隱は「旖旎嫵麗」¹⁵⁾と称賛している。つまり、竹磬は宋詞の二大流派「豪放派」「婉約派」をともに学び、自作の中で、それらを襲ったのである。竹磬は柔軟性をもった詞人であった。

森川竹磬の詞作品を高く評価している高野竹隱は、同じく詩人森春濤の門にあつまった若い

12) 森槐南、高野竹隱、森川竹磬著、張珍懷箋注『日本三家詞箋注』黄山書社（2009）208

13) 萩原正樹（2017）『『詞譜』及び森川竹磬に関する研究』第二部第九章森川竹磬年譜（489頁）

14) 萩原正樹（2017）『『詞譜』及び森川竹磬に関する研究』第二部第九章森川竹磬年譜（497頁）

15) 「詩苑」第二十一集 森川竹磬「法曲獻仙音」

漢詩人であり、二人は深い交わりを結んで詩詞の道に精進した。高野竹隱、名は清雄、別に修蕭仙侶とも號した。文久二年（1862）九月生れで、森槐南に長ずること一歳であった。竹隱は天性、詩才に富み、明治十六年十一月発行の「新文詩」第九十九集に載せられた、彼の「熱海温泉寺古松歌」と題する七古一篇は、その中央詩壇にデビューした作品であるが、当時の詩壇を風靡していた春濤一派の輕薄浮靡の詩風とは全く異り、「用筆矯健、研鍊の妙を極め、何も人の牙を拾はざるのがあった。槐南はそれに痛く衝撃せられたのであらう」¹⁶⁾。このように竹隱は明治期の重要な漢詩人であるが、填詞もよくし「詩苑」には七首が掲載される。

そして、この「詩苑」を繙いて驚くのが、王國維の詞作品四首が掲載されていることである。「詩苑」に収める王國維の詩詞十首については、萩原正樹にすでに専論「『詩苑』に所収王國維の詩詞十首について研究」¹⁷⁾がある。以下、萩原正樹の論文を簡単に紹介する。

王國維は清・宣統三年（1911）十二月から民國五年（1916）二月まで京都に住んでいた。王國維と森川竹磔との間に直接の交渉があったことを示す資料は、現在見出すことができない。王國維の詩詞十首がどの経緯で「詩苑」に掲載されるに至ったかについても、現時点ではよくわかっていない。ただ、王國維は京都滞在中、鈴木虎雄（1878～1963）と親しく交わった。明治四十五年（1912）鈴木虎雄が王國維を訪ねた時、『槐南集』を王國維の家に置いた。この『槐南集』とは、前年の明治四十四（1911）年三月七日に死去した森槐南の詩集であり、全八冊二十八卷に古今體詩二六二一首、詞九十六と曲（小令二闋、南北曲二套）を収録した。槐南は、森川竹磔にとっては義兄（妻の兄）であって、『槐南集』編集に際して最も力を盡したのも竹磔であり、『槐南集』卷二十八の末尾には「森川鍵校字」と記されている。また特に卷二十八所収の槐南詞の小序には竹磔の名がしばしば登場しており、『槐南集』を手にした王國維も、こうした記載を通して森川竹磔の名前を見知ったのではないかと思われるのである¹⁸⁾。

次に、紹介する戸田靜学、名は忠正（1858～1928）は、明治期の司法界で活躍した人物であり、また漢詩人としても知られた。そして、填詞の作ものこしていて、神田喜一郎にも「日本填詞史上、わたくしは靜学を以って優に一席を占めるに足る作家であると思う」¹⁹⁾と、その作詞の力量が高く評価されている。靜学の填詞の作は「詩苑」に発表されている。「詩苑」は「鷗夢新誌」とならんで森川竹磔が発行した雑誌であるから、靜学は竹磔に従って填詞を行っていたと考えられる。

「詩苑」第二十四集（大正四年十月十五日）で、戸田靜学の詞作品「朝中措 寫懷」を載せる。

16) 神田喜一郎（1965）『日本における中国文学 Ⅰ』二玄社、一九六五年刊（301頁）

17) 「学林」（第六十四号）

18) 萩原正樹（2017）「『詩苑』に所収王國維詩詞十首について」『学林』（第六十四号）

19) 萩原正樹（2017）『詞譜』及び森川竹磔に関する研究』附論第三章 靜學詞存（708頁）

朝中措 寫懷

詩林酒海養吾眞。	詩の世界と、酒の海は、私の真性を養ってくれる。
名利看如塵。	私は名利を見ることは浮雲を見るのと同じだ。
誰識雕蟲小伎、	文字に彫琢を凝らす小技など、
	だれが認めてくれるだろうか
賽他富貴浮雲。	他人と富貴を競うなど浮雲のようにむなしいことだ
美人香草、	美しい人とかぐわしい草
楚騷多事、	楚辭の文学は広い世界
遺恨千春。	恨みを千年の歴史にのこしている
未若一生拚與、	一生を捧げるのは、
花花月月乾坤。	花という花、月という月、そして天と地

この詞作品について「竹磧曰、宋代稼軒、清初陳髯、的是夫君替身」とある。つまり竹磧は戸田静学は宋代の辛棄疾、清初の陳髯の生まれ代わりだと賞賛している。この詞は、詩人として生きる戸田静学の悠々たる心境が述べられている。風雅で悲憤感慨の調子がある。これは辛棄疾の詞と大変よく似ている。戸田静学は辛棄疾のこのような調子を意識的に模倣したのでだろう。

また、戸田静学に辛稼軒詞が受容されていた例として、さらに一例を以下に示したい。

南郷子 偶填效稼軒體²⁰⁾

成敗繫存亡、	戦の勝敗は、国家の存亡に関わる。
大舉常驅伐北強。	我が皇軍は大挙して遠征し、北方の強国を討伐した。
將士純忠還義勇、	将校たちは純粹で、忠実で、さらに義勇で
堂堂、	堂堂としている。
我武維揚耀國光。	我が軍の武力は必ず発揚し、国の栄光もますます輝く。
白髮壯心昂、	白髮の、この老いぼれも、志は壮大で高揚している。
夢入遼東大戰場。	夢のなかでは遼東の大戦場に赴いた。
天下英雄先屈指、	それは、天下の英雄はまず誰を挙げるべきか、

20) 萩原正樹（2017）『「詞譜」及び森川竹磧に関する研究』附論第三章 静學詞存（720頁）

東郷, 東郷平八郎だ。
生子當如平八郎。 子を生むなら東郷平八郎のような男子を生まなければならない。

この詞は題下注に「偶たま填して稼軒體に倣う」とあるので、辛稼軒詞に倣って作られたことがわかる。詞の内容からみて、日露戦争の際に作られたと判断できる。この詞が習ったのは、辛棄疾の「南郷子 登京口北固亭有懷」²¹⁾(何處望神州)である。この辛棄疾の作は、風景を描写し、三国時代の興亡の歴史を懐古しながら、金に占領された中原を取り戻し、祖国を再興したいという強い愛国感情を詠ったものである。この詞の中で、「夢入遼東大戰場」は稼軒詞の「夢回吹角連營」(「破陣子 為陳同甫賦壯詞以寄之」²²⁾)と酷似している。さらに、辛棄疾という前例に倣うのは、三国呉の孫権(「孫仲謀」)のような英雄的な人物に、国家の命運を託したいという、辛棄疾の激しい感情が、六朝典故を通じて表現されている。これは、「永遇樂 京口北固亭懷古」²³⁾(千古江山)にもみられる。稼軒詞の重要な特徴である。

日本は明治期、日清・日露戦争を通じて、領土が拡大し、また愛国主義的感情が高揚する。このような感情を詠う手段として、稼軒詞はちょうど良いものであったのだろう。

ここに、日本明治期における、辛稼軒受容のあり方を見ることができるといえる。

「詩苑」の「詞」欄では、藤本煙津の名前が頻出し、しかも掲載される詞作品の多くが極めて優れている。藤本煙津(1838~1926)については横山俊一郎『泊園書院の人びと その七百二人』に評伝があるので、以下引用する。

画家・篆刻家である。播磨神東郡井ノ口村(兵庫県神崎郡福崎町)の繁内甚兵衛の次男として生まれ、のち同村の藤本家の養子となる。南岳門人。名は節二、字は古素、号は煙津。画を鳥神江および村田香谷に、詩文を江馬天江に、篆刻を高田緑雲に学んだ。特に山水画に長じ、大阪、京都、徳島などの共進会に出品して褒状を受ける。明治十二年(一八七九)から神崎郡役所に勤務しながら、郡長・倉本樺山や漢学者・松岡操(柳田國男の父)らと詩歌を楽しんだ。明治二十九年(一八九六)大阪に移住して日本画と篆刻にとりくみ、詩文結社・逍遙游社のメンバーとして漢詩および詞(填詞)にもすぐれた才能を示した²⁴⁾(以下省略)。

藤本煙津が作った詞の特徴については、「詩苑」第九集のなかで、森川竹磯は藤本煙津の「南

21) 鄧廣銘【箋注】『稼軒詞編年箋注』卷五兩浙、鉛山諸什(802頁)

22) 鄧廣銘【箋注】『稼軒詞編年箋注』卷二 帶湖之什(352頁)

23) 鄧廣銘【箋注】『稼軒詞編年箋注』卷五「兩浙、鉛山諸什」(807頁)

24) 横山俊一郎(2021)『泊園書院の人びと その七百二人』(281頁)

郷子」(細雨如煙)を「絶似明人小詞」と讚賞した。そのほか、森川竹筵は「詩苑」第十七集藤本煙津の「柳含煙 漁父」(舟為宅)を「頗似元人小曲子，亦復輕妙」と褒め称える。藤本煙津は、元代の散曲や明清の詞作品を広く学んで填詞を行っていることがわかる。そのほか、竹筵は「踏莎行」²⁵⁾(樹拖餘霞)を「淺而得情，末二句清妙無比」と褒め称え、「摸魚兒」²⁶⁾(客歸來故鄉村巷)を「清和婉約」と評価した。

「詩苑」第六集に掲載された藤本煙津の「柳長春」を以下に示したい。

柳長春

淺碧梳風。	薄緑の柳の葉は、風によって梳(くしけず)られ、
深黄沐雨。	深い黄色の柳のは、雨を受けて沐浴したかのよう。
嬌柔弄色春江路。	春の川のほとりには、柔らかな葉はさまざまな色を見せ、
驕驪嘶去影依依。	名馬、驕驪が嘶いて去ると、
	柳の葉はそれを慕うかのようにたなびく。
鶯梭空織黄金縷。	鶯は梭(ひ)のように行ったりきたりして、
	空中にむなしく黄金の縷衣を織っている。
灞岸天寒。	灞水の岸辺は寒々としている。
章臺日暮。	章臺では太陽が沈もうとしている。
攀條送別人何處。	柳に攀じ登り、枝を取って旅たつ人に送ったが、
	もうどこにいたのかわからない。
東風不解繫相思。	春の風は人が誰かを思う気持ちを理解しない。
纏綿只管牽愁。	ただ柳の長い枝だけが人の愁いを繋ぎ止めている。

評語で森川竹筵はこの詞を「詠春柳、造微入妙、思路絶靈」と称赞した。藤本煙津の作風は優雅で静寂である。この「柳長春」で、藤本煙津は川ほとりの夕方の鮮やかさを美しく表現し、日暮れの静寂に包まれた中、友人との別れが名残惜しくて立ち去りがたい様子を際立させている。前述の通り、藤本煙津は絵画にもすぐれ特に山水画を得意としたと言う。この詞も、煙津が画人でもあり詞人でもあったからこそ書けた、絵画性のある作品でもある。

最後に、水原琴窗、名は實雲(1892~1977)について紹介する。「詩苑」には詞十七首が掲載される。琴窗は、播磨揖保郡香島村(兵庫県たつの市)の人。明治四十一年(1908)泊園書院

25) 「詩苑」第二十五集 藤本煙津「踏莎行」

26) 「詩苑」第二十六集 藤本煙津「摸魚兒」

に入塾した²⁷⁾。琴窗は後に東京に赴き、そこで高野竹隱と森川竹磎に師事し、填詞作家として多くの作品を残した。また、森川竹磎の『夢餘稿詞集』と藤本煙津の『煙津集』を整理した。彼の詞はのちに息子の渭江（1930～）によって、1966年『琴窗詞』（大谷女子大學中國文學教室）として編まれた。

なお、「詩苑」には十七首が掲載される琴窗は第三十六集（大正五年九月）までは「水原整南」という筆名を用いて投稿しているが、水原琴窗は「詩苑」第三十七集（大正五年十月）からは「水原琴窗」に変えている。

四、終わりに

雑誌「詩苑」の中では、多くの詞作品が掲載されている。当時の日本学界において、それは特色のある漢文学雑誌である。この研究ノートでは、「詩苑」に基づいて、日本江戸・明治時期の漢詩人との填詞の創作について紹介する。さらに「詩苑」を通して、日本と中国との文化的な交渉、交流を具体的に示す。ここにその関連資料や漢詩人たちを紹介しておきたい。

また、これをきっかけに、今後は研究焦点を日本詞及び詞籍に当てるだけでなく、国際的な視点から日中の文化交流が活発になった日本の詞人に注目して進めていきたい。

「詩苑」所收詞作者・詞牌一覧

高野竹隱	西江月
久保天隨	江月晃重山
中島樟南	柳梢青
森川竹磎	西江月
	江月晃重山
	關河令

以上為第一集

志水香夢	一落索
田中沧浪	摸魚兒
田邊蓮舟	如夢令
戸田靜學	長相思
森川竹磎	西子妝

以上為第二集

27) 横山俊一郎（2021）『泊園書院の人びと その七百二人』（306頁）

久保天隨	大江東去
陳衡恪	醉落魄
羽生風燈	江城子
森川竹磔	惜黃花
	小鎮西犯

以上為第三集

王國維	浣溪紗
村上琴屋	十六字令
戸田靜學	望江南
陳衡恪	眉嫵
	前調
森川竹磔	浣溪紗

以上為第四集

大野遼鶴	菩薩蠻
戸田靜學	一點春
藤木煙津	調笑令
	昭君怨
羽生風燈	望梅花
森川竹磔	玉聯環
	探春令

以上為第五集

高野竹隱	水調歌頭
熊田晉香	行香子
戸田靜學	長相思
藤本煙津	柳長春
森川竹磔	水調歌頭

以上為第六集

高野竹隱	卜算子
伊藤盤南	憶秦娥
久保天隨	菩薩蠻
今關天彭	浪淘沙
森川竹磔	春雪間早梅

以上為第七集

王國維	蝶戀花
-----	-----

藤本煙津	相見歡
村上琴屋	訴衷情
戸田靜學	梅花引
久保天隨	如夢令
不破清警	前調
中島樟南	踏莎行
羽生風燈	望江南
萩原錦江	長相思
山口槃澗	竹枝
	瑣窗寒

以上為第八集

王國維	蝶戀花
久保天隨	謁金門
大野遼鶴	生查子
藤本煙津	南鄉子
森川竹磔	蝶戀花
	聲聲令

以上為第九集

王國維	點絳脣
藤本煙津	南鄉子
渡邊頼綱	清平樂
森川竹磔	西江月
	瓊台

以上為第十集

高野竹隱	百字令
久保天隨	清平樂
戸田靜學	柳梢青
藤本煙津	霜天曉角
森川竹磔	四字令

(東坡詞)

以上第十一集

高野竹隱	望雲涯引
田中滄浪	菩薩蠻
陳衡恪	祝英臺近
森川竹磔	拜星月慢

以上第十二集

藤本煙津	祝英臺近
山口槃澗	浪淘沙
伊藤盤南	十六字令
森川竹篔	金盞子
	燕山亭

以上第十三集

高野竹隱	采桑子
藤本煙津	唐多令
森川竹篔	采桑子
	夢芙蓉
	綺寮怨

以上第十四集

久保天隨	風蝶令
大野遼鶴	唐多令
戸田靜學	愁倚欄令
森川竹篔	慢卷綢
	曲玉管

以上第十五集

村上琴屋	楊柳枝
田中滄浪	江南春
陳衡恪	暗香
伊藤盤南	菩薩蠻
萩原錦江	浣溪紗
森川竹篔	破陣子

以上第十六集

土屋琴坡	鷓鴣天
藤本煙津	柳含煙
山口槃澗	遼方怨
上島常十	楊柳枝
森川竹篔	玉梅令
	迎春樂

以上為第十七集

久保天隨	采桑子
------	-----

藤本煙津 西江月
 戸田靜學 楊柳枝
 森川竹磔 翻香令
 迎春樂
 尋芳草

以上第十八集

村上琴屋 點絳脣
 相見歡
 山口槃澗 長相思
 藤本煙津 江城子
 森川竹磔 八六子
 被花窗

以上第十九集

況周頤 南浦
 東風第一枝
 藤本煙津 臨江仙
 森川竹磔 孤館深沉
 喜遷鶯

以上第二十集

村上琴屋 南歌子
 大野遼鶴 杏花天
 森山東陽 燕歸來
 森川竹磔 法曲獻仙音
 春聲碎

以上第二十一集

況周頤 綠意
 久保天隨 鷓鴣天
 藤本煙津 更漏子
 山口槃澗 酒泉子
 森川竹磔 塞翁吟

以上第二十二集

久保天隨 南鄉子
 憶江南
 藤本煙津 西江月

森川竹磔	卓牌子近	
		以上第二十三集
細野申三	人月圓	（竹磔：似東坡小令）
戸田靜學	朝中措	（竹磔：稼軒是夫君替身）
藤本煙津	清平樂	
	擣練子	
萩原錦江	減子木蘭花	
森川竹磔	虞美人	
		以上第二十四集
久保天隨	浣溪紗	
藤本煙津	踏莎行	
	畫堂春	
	十六字令	
山口槃澗	前調	
小堀柳塘	憶江南	
森川竹磔	金人捧路盤	
		以上第二十五集
漁歌子	菊池天來	
藤本煙津	夜行船	
	憶秦娥	
	摸魚兒	
森川竹磔	於中好	
		以上第二十六集
久保天隨	點絳脣	
藤本煙津	小重山	
	蘇幕遮	
	長相思	
山口槃澗	鷓鴣天	
森川竹磔	蕊竹閒	
		以上第二十七集
藤本煙津	惜分釵	
	釵頭鳳	
	鷦山溪	
水原粂南	卜算子	

山口槃澗
森川竹磾

太平時
四犯令

以上第二十八集

戸田靜學
藤本煙津
森川竹磾

賀聖朝
慕山溪
鹽角兒
春從天上來
輓繡毬

以上第二十九集

村上琴屋
藤本煙津
渡邊波水
水原懿南
山口槃澗
森川竹磾

春光好
浣溪紗
梅花引
十六字令
鵲橋仙
春光好
前調

以上第三十集

山口槃澗
藤本煙津
水原懿南
小堀柳塘
森川竹磾

玉樓春
念奴嬌
戀情深
南歌子
春風嫋娜

以上第三十一集

戸田靜學

藤本煙津
水原懿南
森川竹磾

柳含煙
琴調相思引
巫山一段雲
喜遷鶯
菩薩蠻
感皇恩

以上第三十二集

久保天隨
山口槃澗
水原懿南
小堀柳塘

踏莎行
昭君怨
繡帶兒
憶江南

森山東陽 柳含煙
森川竹篔 玲瓏玉

以上第三十二集

久保天隨 清平樂
藤本煙津 浪淘沙
水原髣南 拋繡球
山口槃澗 沙塞子
森川竹篔 薄倖

以上第三十三集

藤本煙津 破陣子
長相思
水原髣南 玉樓春
羽生風燈 浣溪紗
萩原錦江 前調
森川竹篔 西江月慢

以上第三十四集

藤本煙津 破陣子
長相思
水原髣南 玉樓春
羽生風燈 浣溪紗
萩原錦江 前調
森川竹篔 西江月慢

以上第三十五集

中島樟南 人月圓
藤本煙津 水龍吟
鳳栖梧
水原髣南 遐方怨
南歌子
森川竹篔 減蘭

以上第三十六集

戸田靜學 阮郎歸
前調
水原琴窗 沙塞子
山口槃澗 三字令

萩原錦江
森川竹磔

思佳客
小重山

以上第三十七集

戸田静學
藤本煙津

柳梢青
訴衷情
虞美人

水原琴窗
山口槃澗
森川竹磔

滿宮花
蒼梧謠
繡鸞鳳花犯

以上第三十八集

藤本煙津

滿庭芳
一翦梅
好事近

中島樟南
森川竹磔

清平樂
徵招

以上第三十九集

久保天隨
藤本煙津

憶王孫
南柯子
烏夜啼

水原琴窗
梅花隄
森川竹磔

浣溪紗
長相思
望遠行

以上第四十集

藤本煙津
水原琴窗
山口槃澗
森川竹磔

祝英臺近
畫堂春
漁父
陽春
白雪

以上第四十一集

森川竹磔

酒泉子（池上柳條）
又（燈淺月深）
又（日影樓心）
又（兩兩鴛鴦）
又（煙雨霏微）

又（理了晩妝）

又（金縷鞋提）

以上第四十二集

藤本煙津
水原琴窗
山口槃澗
森川竹磔

木蘭花慢
感恩多
竹枝
步月
酒泉子（幽夢靈通）
采桑子

以上第四十三集

高野竹隱
久保天隨
中島樟南
藤本煙津
藤井蒼龍
森川竹磔

柳梢青
惜分飛
十六字令
點絳脣
江南春
高陽臺

以上第四十四集

藤本煙津
水原琴窗
山口槃澗
森川竹磔

新荷葉
昭君怨
一絡索
瑞鶴仙
垂絲釣（繡簾綺戶）

以上第四十五集

藤本煙津
神田喜
水原琴窗
森川竹磔

臨江仙
憶江南
蝶戀花
荷葉鋪水面
河傳

以上第四十六集

藤本煙津
土屋琴坡
山口槃澗
森川竹磔

行香子
南鄉一剪梅
巫山一段雲
瑞鷓鴣（年少風流）
又（墮珥遺簪）

以上第四十七集

藤本煙津	齊天樂
	永遇樂
磯谷春泉	南歌子
水原琴窗	攤破浣溪紗
森川竹磔	憶故人

以上為第四十八集

参考文献

- 萩原正樹（2017）『「詞譜」及び森川竹磔に関する研究』
萩原正樹（2016）『森川竹磔『詞律大成』本文と解題』
森槐南、高野竹隱、森川竹磔著、張珍懷箋注『日本三家詞箋注』黄山書社（2009）
神田喜一郎『日本における中国文学 I』二玄社、1965年刊
「学林」（2017）（第64号）
横山俊一郎（2021）『泊園書院の人びと その七百二人』
「新新文詩」
『新文詩』
「詩苑」